

# 日本の朝鮮統治期における 明治学院留学生に関する共同研究

## 李光洙(イ・グワンス)について —波田野節子氏の研究を中心に—

嶋田 彩司・金 珍娥・徐 正敏・鄭 栄桓・渡辺 祐子・佐藤 飛文・野間 秀樹

下記の通り、3回の研究発表会を開催した。

5月24日(金) 報告者: 波田野節子氏

7月3日(水) 報告者: 松山献氏

7月25日(木) 報告者: 李容敏氏・孫昇鎬氏・姜イレ氏

これらのうちで、研究プロジェクトの基調をなすものは波田野氏による研究報告であり、11月に計画されていた李光洙に関わる国際シンポジウムの準備を念頭に、それ以降の研究会も主として李光洙(イ・グワンス: 以下は漢字表記する)に焦点を当てて報告と意見交換をおこなった。

本稿は、それらの共同研究の成果を稿者(プロジェクト責任者: 嶋田彩司)が総合したものであるが、標記のごとく波田野氏の研究に拠るところが多いことをあらかじめ記しておく。

波田野氏によれば、1876年の開国以降1910年の日韓併合までの期間における朝鮮半島出身者の日本留学は、その盛期を三つに分けることができるという(『韓国近代作家たちの日本留学』、2013年3月、白帝社)。すなわち第一は1881年の紳士遊覧団62名の来日時から1884年の甲申政変まで、第二は1894年にはじまる甲午改革からの二年間、そして第三は皇室特派留学生が派遣された保護条約前年から日韓併合までである。

第一期については、紳士遊覧団に随行して残留し、慶應義塾等で学んだ兪吉濬、柳定秀、尹至昊が知られており、第二期には開化派政権のもと二百名を超える留学生が派遣されたなかで安国善等が著名である。第三期には上記特派留学生のほか、多数の私費留学生が来日しており、波田野氏によれば日本留学が旧来の科挙の代替として機能したかのごとくであったという。

そして、本プロジェクトのねらいに即して特筆すべきことは、第三期の留学生たちには、併合直前の政治状況下、留学先である日本に対して祖国の迫害者として敵愾心を抱く傾向があったとされていることである。帝国主義下の日本が併合前とはいえ実質的な植民地とした朝鮮半島でおこなった歴史的事実を思えば、その心情は当然のものといえなくもないが、そうであればなおさら、祖国を呑み込もうとするまさにその「敵国」へ留学して学ぶ若者たちの心理的ストレスは察するにあまりある。

たとえば、崔南善は日本の書店にある豊富な刊行物を目にして、

その前でうなだれ、ため息をつき、つづいて拳を握りしめ、握りしめながら、「いつかは機会があるはずだ」という望みをいだいて自分を慰めた。

と書いている。

同じ時代を生き、支配者日本の物心両面を実際に経験した者として、李光洙もまたそのような日本に対する複雑に屈折した感情を抱いていたのであるとすれば、そこに李光洙の後年の親日的態度

を読み解く鍵も含まれているように思われる。

李光洙は1892年、平安北道に生まれた。貧しい家庭であったというよりも、家庭そのものが崩壊しており、十代のはじめは半ば浮浪児のようであったが、やがて東学教徒に助けられてそこで伝令のような使い走りをしていたとされる。1904年に創設された東学党の政治団体「進歩会」は、翌年「一進会」となり、親日的な活動を始めるが、その一環として李光洙は日本への留学の機会を得る。

ところが程なく、東学党では第三代教祖孫秉熙（「天道教」）と「一進会」の李容九のあいだに内部分裂が生じ、留学生への学費給付が停止してしまう。このため李光洙の留学は中断を余儀なくされる。しかし、日本に留まった「一進会」留学生の抗議示威行動（「断指事件」）が功を奏して、李光洙は官費留学生として再び渡日する。そして、白山学舎での受験準備を経て、1907年の9月に明治学院普通部三年に編入学するのである（第一次留学）。

やがて李光洙は、1910年に明治学院を卒業、李昇薫の創立した五山学校に赴任する。この学校での教員生活は、あいだに大陸放浪の期間を挟んで1915年までつづき、その後彼は同年9月に早稲田大学予科に入学、翌年には同大学の文学部哲学科に進んでいる（第二次留学）。

五山学校での生活を切り上げ、三度目の来日を果たすにあたっては、五山学校復帰（1914年8月）時にすでに「東京に行って学業を継続する決心」（「文壇生活三十年の回顧」）があったということであるが、彼にそう決意させた要因の一つとして、第一次留学時に、文一平や洪命憲と知り合ったことをあげることができよう。

李光洙と兩名との出会いは、1906年（一旦帰国前）の大成中学時代に同じ下宿に住んだことがきっかけであったという。文一平は歴史家、教育者として今日なお高い評価を得ている人物であり、明治学院、早稲田大学の同窓でもある。李光洙の明治学院や早稲田への進学に影響を及ぼしたことも考えられよう。洪命憲は、李光洙に文学の魅力を伝えた最も重要な人物のひとりである。波田野氏の研究によれば、バイロンや漱石等々の西洋文学や日本文学を、李光洙は洪命憲の蔵書を与えられることで知ったという（『李光洙・「無情」の研究』、2008年9月、白帝社）。

つまり、李光洙の言論活動が活発化し、文学活動が本格化するのには、1915年の早稲田時代以降であり、彼が早稲田で多くのことを学んだことはまちがいない。代表作『無情』が執筆されたのもこの時期（1917年）である（11月に開催されたシンポジウムにおいて、パネリストのひとり方瑛昊氏は、『無情』とカントの関係を論じ、そこに早稲田大学哲学科教授波多野精一が影響を及ぼした可能性に言及している）。しかし、そうであるとしても、そのような文筆家李光洙を育んだ母胎ともいべき時と場所が第一次留学時代にあったことは注目されてよい。

そして、上記した崔南善もまた李光洙の友人のひとりであった。1908年に崔南善が創刊した月

刊誌『少年』に李光洙は初期の小説・論説を発表している。おそらくは崔南善が示したような（上掲）支配者日本に対する反発と母国への愛着を李光洙もまた共有していたはずである。そして、そのような感情をひとまとまりの論理的なことばとして表明するための思想的、文学的契機を彼らはほかならぬ「敵地」日本からうけとり、日本語を通して（つまり書店にずらりと並んだ本の繙読によって）鍛錬したのである。

波田野氏は次のような李光洙の二面性を紹介している（前掲『韓国近代作家たちの日本留学』）。すなわち、雑誌『洪水以後』三月号（1916年）に発表された「朝鮮人教育に対する要望」において、李光洙（筆名：孤舟生）は、内地人と同じく「天皇の赤子」たる朝鮮人に対して同等の教育を要求するが、それが実現されるなら「朝鮮人は真に皇恩に浴したるを衷心から感謝するであらう」などと述べている。これがいわゆる親日家李光洙というイメージに直結する言辞であることは明白であろう。

ところが、一方において李光洙は、同誌次月号に匿名で投稿した文章（「朝鮮人の眼に映りたる日本人の欠点」）においては、「日本人はただに朝鮮人を冷遇するのみならず、進みてその職を奪い、その資財を捲き上げて餓死せしめんと努めつつあり。日本人は我々朝鮮人にとりてはあたかも寄生虫のごとし」などと痛烈に批判、罵倒しているという（同文は結果的には不掲載）。

後日になって、李光洙は自らこの点について次のように述べている。

「われわれ朝鮮人の教育機関を作ってくれ」と言いたい場合は、言論人や公職者は「同じ天皇の赤子ではないか、なぜ教育に差別があるのだ」と言わなければ、当時は通じなかった。官公職の朝鮮への制限や差別打破をさげふための公式は、「みんな天皇の赤子ではないか、内鮮一体ではないか、明治大帝の御心ではないか、なぜ内鮮差別をするのだ」というものだった。（「나의告白」、1948年）

ここにいう「公式」の語を、正当な自己弁護と受け取ることも、見苦しい言い訳と断罪することも稿者にはできない。この複雑な屈折を、そのような時代を経験しないものが、しかも加害の側にあったものの子孫たちが評価をするためには、より深く深く李光洙のなかに沈潜する時間が必要であろう。もちろん稿者は宮田節子氏（『朝鮮民衆と「皇民化」政策』）や波田野氏が自らの見解を述べられるその内容に傾聴し、それぞれがそれぞれにそう述べられる正しさを認めたいと思うが、稿者自身もまたそのように考えることができるかどうかについてはまだいえない。

11月に成功裏に終了したシンポジウムのテーマは、「イ・グワンスとはだれか」であった。ここでは、パネリストとして寄稿、発表をされた日韓の研究者それぞれの李光洙が語られ、稿者はそれを興味深く聞いた。本研究プロジェクトのゴールを稿者はシンポジウムに設定した。そのシンポジウムを終えたいま、ようやくその李光洙と向き合う地点に立ったのだと感じている。